教職ポートフォリオに見る家庭科履修者の特徴

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>青木 幸子</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東京家政大学研究紀要 人文社会科学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>54</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2014年</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>東京家政大学</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00009336/">http://id.nii.ac.jp/1653/00009336/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
教職eポートフォリオに見る家庭科履修者の特徴

青山 幸子
（平成25年12月12日受理）

Characteristics of Home Economics Students in Teacher-Training Courses that include an E-portfolio for the Teaching Profession

Aoki, Sachiko
(Accepted for publication 12 December 2013)

キーワード：家庭科，教職eポートフォリオ，履修カルテ，学習意欲，就業意態
Key words: home economics, e-portfolio for teaching profession, personal subject records, motivation, volition to be a teacher

1. はじめに

グローバル化の進展が著しい現代社会において，人材の育成は最重要課題であり，教育をめぐる改革のスピードが増している。2006（平成18年），中央教育審議会は「今後の教員養成・免許制度の在り方について」を答申し，教職に関する学科科目として「教職実践演習」の導入を提案した。この科目は，教員養成を終えた最終学年の後期に開設することとし，教員に必要とされる最低限の基本的な資質能力を修得させることを目的としている。そのため，「教職実践演習」の履修にあたりその前提条件として，それまでの学修を記録する「履修カルテ」の作成が義務づけられた。

そこで，本学では幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各教科，栄養・養護教科など多様な免許状に係る教員養成を含む，しかも教職課程履修者数が多いことに鑑み，教員養成教育推進室を中心に検討を進め，幼獣園教員を除く教職課程履修者を対象に「履修カルテ」として「教職eポートフォリオ」を導入することにした。

システム構築から運用3年を迎えた2012（平成24年）年度，教職eポートフォリオの導入初期段階における教育効果と課題について把握することを目的に，学生を対象とし，第一次調査を実施した。さらに，教職eポートフォリオの「教師コメント」を入力した教員を対象とした教員調査も実施した。両調査の結果を，本学情報システムおよび研究報告書にまとめることで，教職eポートフォリオの効果とともに，システムの運用方法，学修活動の活性化を含めた教育内容や方法，学習環境の改善などの課題把握の可能性が，教員養成の使命と責任を再確認する契機となり，同時に，調査結果より明らかになった一つの特徴は，学科・専攻により教職eポートフォリオの取り組みや効果に差が見られたことである。そこで免許状ごとの特徴を把握し，学生の実態に見合ったより適切な改善策を講じることでポートフォリオの効果を高めることができるのではないかと考えた。本稿では，授業改善や学生指導など具体的な教職課程運営に活かすための知見を得るため，筆者の専門を考慮して家庭科履修者の特徴を把握することを目的とする。

2. 研究方法

（1）対象
本学3年生の教職課程履修者415名（内，家庭科免許状取得希望者79名）

（2）調査時期
2012年6月

（3）調査方法
集計調査：調査配票数415，有効票412，有効回収率99.3%。

（4）分析方法
①調査項目に関する家庭科履修者の結果について単純集計を行い，教職に関する意識と教職eポートフォリオへの取り組み実態を把握する。また，全体集計の結果と比較する。
②さらに，教職への就業意志との関係についてクロス集計を行い，家庭科履修者の特徴を明らかにする。
③それらの分析を踏まえ，大学としての質保証に果たす教職eポートフォリオの可能性について検討する。
④統計解析にはSPSS（ver.19）を用いた。

東京家政大学短期大学部栄養科

（103）
3. 結果及び考察
(1) 家庭科履修者の教職に関する意識の特徴
教員免許状取得希望理由の調査結果を図1に示した。家庭科履修者は、「①将来の選択肢を増やすため」「資格取得を目指している学生が60%以上多い。その後の理由として「①家族に勧められたから」32.9%、「①教職に魅力を感じたから」27.8%、「①やりがいのある職業だから」25.3%が続く。後者の中には見られるように家庭科履修者の約四分の一は、教職に積極的な意識を見出している学生である。一方、大学入試の結果は、「教職に魅力を感じたから」50.5%、「やりがいのある職業だから」31.8%が示す通り、教職に積極的な意識を見出している学生は、家庭科履修者よりも少ないと高い割合を示し、異なる傾向を見ている。

(2) 教職への就業意志
図3に示す通り、家庭科履修者の教職への就業意志は大学入試の結果で全体一致率75.9%が高い。しかし、「必ず就きたい」「できれば就きたい」割合は合わせて24.0%であり、免許状取得理由の四分の一に近い数値である。家庭科履修者の就業意向は免許状取得理由と同じ傾向を認める。家庭科履修者の教職への就業意志は大学入試の結果より16.0ポイントも少ない。

3）教員免許状取得希望時期と就業意志
教員免許状取得希望時期と就業意志との関係についてクロス集計を行った結果を図4に示した。「中学校入学前」から教員免許状の取得を希望していた学生は、「必ず就きたい」「できれば就きたい」が50%を占め、100%教職への就業意志があることが分かる。「中学校生中」の希望者は「必ず就きたい」66.7%、「迷っている」33%で、三分の二の学生は意志が明確である。一方、「中学校生中」の希望者は「必ず就きたい」「できれば就きたい」を合わせて19.3%、「大学入学後」の同様の希望者は17.5%であり、就業意志の高い学生は約五分の一に到達する。教員免許状の取得希望時期が早いほど、教職への就業意志が強いことが明らかになった。

（2）家庭科履修者の教職eポートフォリオに関する実態
教職eポートフォリオの作成に関する調査項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を肯定的評価、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を否定的評価と分類して分析した。
1) 教職eポートフォリオへの理解
さまざまな情報や意志を有する家庭科履修者の教職eポートフォリオの理解度を図5に示した。教職eポートフォリオの目的や内容について理解している学生は約70%であるが、教職実践現象との関係や教員に必要とされる基本的な能力について理解している学生は50%以下と低く、教職eポートフォリオへの理解を周知徹底する必要が確認された。

図5 教職eポートフォリオの理解度(n=79)

2) 教職eポートフォリオへの取り組み姿勢
教職eポートフォリオへの取り組み姿勢を図6に示した。「①教職eポートフォリオの目的を理解し、取り組むことができている」55.7%、その際に「④教員からのアドバイスを参考にしている」学生は46.9%、「⑥教員からのアドバイスを参考にしているが、教職eポートフォリオの内容が不十分である」35.5%、「⑧教職課題履修の目的が明確になった」30.9%、「⑩教職eポートフォリオの理解が向上した」21.9%と、具体的な教職eポートフォリオの活用に関する内容については否定的評価が著しい。

3) 教職eポートフォリオの有効性と達成状況
教職eポートフォリオを作成したことによる有効性・達成状況を図7に示した。有効性・達成感ありと半数以上の学生成績が著しく向上し、「⑦教職eポートフォリオの有効性・達成状況(n=79)」

学生が肯定的に評価しているのは、⑦教職課題履修の目的が明確になった」91.0%を筆頭に、「⑧教職課題履修の目的が明確になった」77.2%、「⑧教職課題履修の目的が明確になった」60.8%、「⑩教職課題履修の目的が明確になった」54.4%の4項目であり、着実な質試料を形成していくためのプロセスにおいて高い評価をしており、達成目標の達成を促進している。しかし、教職課題履修の初期の学修であることを考慮に入れ、具体的な質試料形成の成果を確認しにくいこと、学習意欲や成績の向上に結び付いていないという課題も明らかになった。

それぞれの項目の関係性を把握するため2変量相関分析を行った結果、相互に1%水準で有意差が認められた。特に強い相関が認められたのは、「⑦教職課題履修の目的が明確になった」と「⑧教職課題履修の目的が明確になった」と「⑩教職課題履修の目的が明確になった」と「⑨教職課題履修の目的が明確になった」と「⑩教職課題履修の目的が明確になった」と「⑨教職課題履修の目的が明確になった」と「⑩教職課題履修の目的が明確になった」と「⑨教職課題履修の目的が明確になった」と「⑩教職課題履修の目的が明確になった」と「⑨教職課題履修の目的が明確になった」である。

以上のことから、教職eポートフォリオの有効性や達成状況の割合を高めていくことが相対的に教員としての力量形成につながっていくことが期待される。

図7 教職eポートフォリオの有効性・達成状況(n=79)
4）教員に求められる資質能力の獲得程度

文部科学省の指針を参考とした教員に求められる能力について，2年間の学修結果を図8に示した．半数以上の学生が「獲得あり」と肯定的に評価したのは，「③他者と協力する力」81.0％，「④コミュニケーション力」76.0％，「②子どもについての理解力」63.3％，「①学校教育についての理解力」58.3％，「⑤教科・教育課程に関する基礎知識・技能」57.0％の5項目である．否定的評価は，「④教育実践力」17.8％，「⑦課題探求力」26.8％の2項目である。

ただし，カイ2乗検定の結果は有意ではなかった。

また，就業意志と有効性・達成状況との関係においては，就業意志の明確な学生ほど「⑥成績評価を気にするようになっ
た」ことが分かる．（図10）カイ2乗検定の結果，5％
水準で有意であった．（$\chi^2=17.362, p=0.043$）

図8 教員に求められる資質能力の獲得程度（n=79）

このような能力指標の評価には，学科・専攻のカリキュラ
ムのほか，部活・サークル活動・ボランティア活動など大
学生活全体を通した活動体験も関係している。

これら7つの指標の相関関係についても2変量相関分析
を行った結果，「③他者と協力する力」も「⑥教育実践力」
を除いた他の項目間に1％水準で有意差が見られた。

おそらく，「③他者と協力する力」と「④コミュニケーション
力」，「⑥教育実践力」と「⑦課題探求力」には強い相関が
認められた。

（3）家庭科履修者の就業意志と関連の強い項目

教職への就業意志と教職eポートフォリオへの取り組み
姿勢との関係において，「①教職eポートフォリオの目
的を理解し，取り組むことが得意な人」について明確な
差異が見られた．（図9）就業意志のある学生は80％以上
が目的を理解して取り組んでいるのに対して，迷っている
学生やまったく就業意志のない学生は50％未満であった。

さらに，就業意志と能力獲得程度の関係を分析すると，
就業意志が明確な学生ほど「⑤教科・教育課程に関する基
礎知識・技能」（⑥教職実践力）と「⑥教育実践力」
の獲得が高いことが分かった．（図11）特に，家庭科履修者全
体では獲得割合が低かった
「⑥教育実践力」において差が見られたときは，就業意
志の強い学生は日常の学修もなく，部活・サークル活
動やティーチング・アシスタント（T.A.）として教育現場
との関わりを意図的に持つほど，教員としての資質力量形
成に励んでいることが伺われる結果となった，意図的
な行動を伴わない学生は，就業意志が強くても，それらの能力
の獲得程度は低い。

図9 就業意志と教職eポートフォリオへの取り組み（n=79）

図10 就業意志と教職eポートフォリオの有効性・達成状況（n=79）

ー成績評価への関係ー

図11 就業意志と能力獲得程度（n=79）

ー教科・教育課程に関する基礎知識・技能ー

図12 就業意志と能力獲得程度（n=79）

ー教育実践力ー
（4）大学の質保証と教職eポートフォリオの可能性

以上のように教職eポートフォリオの導入時期段階の家庭科教保者の実態から、教職への就業意志が強く学生ほど教職eポートフォリオを有効に活用し、自身の資質能力形成に役立て、成果を実感している姿が明らかになる。しかし、その他四分の三を占める教職への就業意志があるが、学生やままだなくて就業意志がない学生にとっては、教職eポートフォリオはどのような意味を持っているのだろうか。

就業意志のない学生の結果から大学の質保証の一環として教職eポートフォリオの活用について考えてみたい。

教職eポートフォリオについては、教職課程オリエンテーションで目的や内容の概要について説明し、その具体的作成に当たって説明会を開催している。そこでは「教職eポートフォリオ・ガイドブック」を配布し、パワーポイントを活用しながら入力方法を説明し理解を図っている。さらに、ピアメンターを配置するなど入力支援体制を整えていっている。このようなプロセスを経て、学生は教職eポートフォリオの作成に着手していく。

教職への就業を望まない学生のうち半数以上の学生が教職eポートフォリオを効果ありと評価したのは、「①学修状況の振り返り」78.3％、「②学修目標の設定」75.0％、「③成績評価への関心」63.3％、「④将来の進路」55.0％の4項目であった。これらの結果から、就業意志に関わらず学生は大学での学びについて主体性を発揮しており、専門的な知識・技能の習得に向けた自覚的な取り組みを始めているといえる。そのことが、「④将来の進路」を考えることにつながり、学修の質を高め、それが学修の成果へと還元され、さらなる学修目標の設定へと循環していく取り組みとして定着していくことを期待したい。

すでに「教職eポートフォリオの有効性・達成状況」において、「学習意欲」が「将来の進路」や「学修目標の設定」、「資質能力形成」、「成績評価への関心」と強い相関があることを指摘した。「学習意欲の向上」を引き出す意図的な働きかけが必要である。

学生がその資質と能力を全面的に開花し、将来設計への指標となるべき資格を取得し、カリスマ形成を促進できるに足る基礎的必要な知識・技能を保証する学びを我々は提供しなければならない。そのためにも、学生生活全体を通じた教育活動が重要な意味を持つ。少なくとも学生が大学で学ぶことの意味と学修への姿勢を問い直すことは、すべての学生に共通するeポートフォリオの効果として確認できるのではないかだろう。「師匠カルテル」による学修内容の蓄積は、自らを省み、将来を設計するための契機として有意味な取り組みでもあると考える。

学びとは、「世界づくし」＜仲間づくり＞＜自分づくり＞の三位一体による「意味と関係の編み直し」の繰り返しである。佐藤学は定義しているが、授業内の内容だけでなく学びの目標が達成されるわけではない、どのような方法で、誰と学び合うかによっても、「意味と関係の編み直し」はその範囲やレベルを変える。教える側もそのことを肝に呪って学び甲斐のある授業を展開していく責務がある。

4．要約

導入時期段階の教職eポートフォリオの作成を通じて、家庭科教保者の教職への就業意志による特徴について分析し、次のような知見を得た。

①家庭科教保者の四分の一は、教職に積極的な意味を見出している学生である。

②教職eポートフォリオの作成は、「学修状況の振り返り」と「学修目標の設定」について約80％、「将来の進路」や「成績評価への関心」について50％以上の学生が効果ありと肯定的に評価している。

③これらの効果を教職への就業意志で比較すると、意志が明らかに学生ほど「教職としての資質能力形成」において有意な特徴を示し、同時に「学習意欲の向上」「成績評価の向上」において肯定的に評価している。

④教員に求められる能力の獲得程度で、教職への就業意志が明らかな学生ほど「学校教育についての理解力」「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」「教育実践力」「課題探求力」において肯定的に評価している。

⑤教職eポートフォリオは、教職への就業意志の強い学生には効果が顕著である。一方、就業意志のない学生にとってはも焦らす結果に見られるとおり、教職eポートフォリオの作成は、「学修状況の振り返り」と「学修目標の設定」等に一定の役割を果たしていることが確認された。

⑥教職eポートフォリオは、学生自身による主体的な取り組みを推奨することで、大学生活全体の質的向上を図る役割が期待される。

開放制の教員養成制度において、必ずしも教員をめざす学生だけが教職課程を履修している状況ではない、そのための課題も指摘されている。しかし、開放制の本的な意味、多様な資質能力を養成する教員を養成することを目的としたものであり、画一的でない個性豊かな教員の養成にあり、教職eポートフォリオは教員をめざす学生はもちろん、めざさない学生にも共通の効果が確認された。それは学修活動の質的充実を促す可能性である。その可能性を高めるためにも、教員による授業のデザイン・展開・評価についての多角的分析は必要である。教員養成や教師教育において授業実践の検証や研究が重視されるようになってきたのは、そこに指導者の資質能力と密接に関わる要因
を学ぶことができるからである。学生の自らの学びの履
歴であるラーニング・ポートフォリオを作成するように、
教員にも自分の教育・研究履歴や授業計画と省察などテー
チング・ポートフォリオの作成が加速されることで、大学
での学びに質的転換をもたらす可能性を秘めている。授業
をめざす学生は、教員のそうした取り組みを一つの範とす
ることで自己の資質を必要に役立てることもできる。
長い伝統と実績に支えられ、多くの家庭科教員を養成し
教員としての学びにおいて、個性と創造性に溢れただけを
引き続き養成できるよう得られた知見に基づいて改善策を
講じるとともに、学生の将来設計をサポートしていきたい
と考える。

参考文献
1）青木幸子・川重正浩・渡部晃正・走井洋一・相良麻里・
中島嗣子：ICTを活用した教員養成教育に関する研究—
教職eポートフォリオに関する第二次調査の結果より—,
東京家政大学博物館紀要，18（東京），2013，pp.39-55
青木幸子・川重正浩・渡部晃正・走井洋一・相良麻里・
中島嗣子：ICTを活用した教員養成教育に関する研究
研究報告書，2013
2）佐藤学：「学び」から逃走する子どもたち 岩波ブッ
クレット524，岩波書店（東京），2002，pp.56-57
3）秋田喜代美編：授業研究と話話分析，放送大学教育振
興会（東京），2013

Abstract

This study analyzed the characteristics of the students who took a Home Economics Course concerning the effects and issues arisen from making out e-portfolio for teaching profession. And also I have examined the meaning of personal subject records in learning. The results are as follows:

1. A quarter of the students who took a Home Economics Course found it to have a positive effect on their teaching.

2. About eighty percent of the students who created an e-portfolio said the experience had a positive effect, particularly in terms of looking back on learning and setting learning aims. More than fifty percent of the students evaluate the project positively with regard to “their future after leaving university” and “the interest in the assessment of school record.”

3. Students who had a strong desire to enter the teaching profession benefitted more from the creation of an e-portfolio than other students did.

4. However those students who don’t desire to enter the teaching profession, found that making of an e-portfolio for the teaching profession helped to heighten the quality of learning because they came to concern themselves positively with learning.